

阪神大震災25年

災害に強い しなやかな社会へ

国際防災・人道支援フォーラム2020

国際防災・人道支援フォーラム2020（人と防災未来センター、兵庫県などの実行委員会主催、朝日新聞社など後援）が22日、神戸市中央区で開かれた。「持続可能な開発目標（SDGs）」と防災がテーマで、日米の国際組織の代表や研究者が取り組みを発表し、災害に強いしなやかな社会をどうやって実現するかについて話し合った。

パネルディスカッション

茅野龍馬さん



世界保健機関（WHO）健康開発総合研究センター医官、長崎大学医学部卒業後、同大国際連携研究戦略本部助教などをを経て、国際保健に貢献する。

弱い立場の人への対応が課題

今、世界的に災害に対する脆弱性が増している。都市に人口が集中し、一度災害が起きると、多くの人に影響を与える状況がある。格差も広がり、貧困層も増加している。高齢化も進んでいる。災害に弱い人たちに

どうアプローチするかが、重要な課題だ。防災の目標は、人命と暮らし、健康を守ること。WHOは世界中の専門家とネットワークを作り、どういう問題がどれくらいあって、どんな対策が必要

なのかといった科学的根拠を積み上げる努力をしている。

日本の保健領域では、阪神大震災をきっかけにできた災害派遣医療チーム（DMAT）などが、災害などの危機から回復する力に長けたレジリエントな社会をつくる非常に大事なシステムになっている。

前田利蔵さん



地球環境戦略研究機関（IGES）関西研究センター副所長。専門は都市環境学や都市環境政策。IGESバンコク地域センター所長などをを経て、18年から現職。

気候変動でリスク変化 対策を

ASEANに加盟する東南アジアの10カ国で、防災と気候変動対策の実施状況の調査をしている。激しい雨が頻繁に降るようになったため、これまでのリスク評価が通用しなくなっており、気候変動の影響を考慮した

評価をしている。ラオスではセドン川流域を対象にした。モデルを作り、どれだけ雨が降ったらどれだけ流出するか。10年後、20年後に気候変動によってどれほど影響が出るか。ハザードマップを作り、

それを土地利用計画まで落とし込んでいる。

ハード対策は限界を迎えており、リスクを開示して、災害教育プログラムに落とし込み、非常に訓練する必要がある。さらに実施できる防災体制を強化しなければいけない。

藤田裕之さん



レジリエント・シティ京都都市統括、京都大学教育学部卒業後、京都市に勤務。市教委生涯学習部長、右京区長、副市長などをを経て現職。市国際交流会館館長も務める。

街の復興 市民のつながりが鍵

ロックフェラー財団の「100のレジリエント・シティ」に京都市が選ばれた。市は今年度の予算編成の柱に、レジリエンスとSDGsの達成を都市計画の理念として、まちづくりを進めることを掲げている。

レジリエンスは、京都の歴史に集約されているのではない。戦乱、大火、震災などの危機に直面し、その都度、町衆が立ち上がって街を復興させてきた。背景には緊密な地域コミュニ

ティーがある。地域の運動会や自主防災組織の訓練などのような市民のつながりは、京都の宝だ。それは災害に強い街につながる。「しなやかに強く」。市のレジリエンス戦略で掲げている考え方だ。ピンチをチャンスに変えていく発想を大切にしたい。

西野燕子さん



国際協力機構（JICA）関西センター所長。内閣府男女共同参画局の出身や、スリランカ事務所所長、ジェンダー平等・貧困削減推進室長、広報室長、評価部長などをを経て現職。

世界の現状 まず知ることから

JICAは人間の安全保障と、質の高い成長の実現というミッションを掲げている。そのため、貧困を助長する災害への対応が不可欠だ。社会的な弱者に目を向けるSDGsの考え方と非常に親和性がある。

防災協力の面でJICAは、仙台防災枠組に記される四つの優先行動「災害リスクの理解」「災害リスク・ガバナンスの強化」「防災投資」「より良い復興」に沿って展開している。2004年にはタイのバンコク

で、洪水時に運行できる地下鉄を整備。そのほか、開発途上国の防災人材を育成するための研修員の受け入れも進めている。

防災は、SDGsの達成に不可欠な要素だ。多くの人にSDGsや世界の課題を知ってもらい、できることから参加してほしい。

総括

理想かなえる努力を

人と防災未来センター長 河田恵昭さん



レジリエンスとSDGsのいずれも、目標が非常に多くなっている。「目標が画一的だ」と主張して協力しない人がいる一方、多様であればいいかという、それでは狙いがぼやけてしまう。参加する組織が多くなれば、多様な目標を社会全体で補い合える。そういう考え方が、わが国ではなかなか共有されていない。SDGsを実現するのは理想で、

レジリエンスと同じ。だが、理想と現実を結びつける努力なしに社会は豊かにならない。阪神大震災を経験した私たちは、国内外に発信する努力を続けたいといきたい。

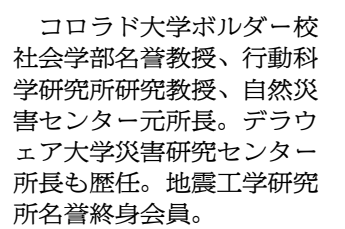
人と防災未来センター長。専門は防災・減災・縮減。国際防災・人道支援協議会（DRA）会長代行、関西大学社会安全研究センター長、京都大学名誉教授。

15年の国連防災世界会議で採択された防災行動指針。被害を大幅に減らすことを目指し、30年までに世界が達成すべき7つの目標を設定。死者数や被災者数、経済的損失を減らす一方、災害リスク管理の活用できる人を増やせるよう、災害リスク管理のための統治と制度の強化などを、国や地域が優先すべき行動として定めた。

地球環境や経済活動、人びとの暮らしを将来にわたって維持できるようにするため、15年の国連総会で採択された行動計画。すべての加盟国が30年までに取り組むこととされた。貧困の撲滅やジェンダーの平等、気候変動対策など17分野の目標が掲げられており、そのための具体的な行動の目安となる169のターゲットが設けられている。

持続可能な開発目標（SDGs）

仙台防災枠組



コロラド大学ボルダー校社会学部名誉教授、行動科学研究所研究教授、自然災害センター元所長。デラウェア大学災害研究センター所長も歴任。地震工学研究所名誉終身会員。

ただ、当初の支援後、多くの都市は追加の資金提供を受けられなかった。地方自治体の行政官の交代によって、戦いを支援するプログラムに、それが行われる事態も起きた。戦いの策定すらできていない都市もある。米国中央部にあるオクラホマ州タルサ市は、これまで深刻な水害に見舞われてきた。1974年の水害保護プロジェクト開始を機に、氾濫の土地を購入し、建物が高くないようにしたほか、洪水調整池の造成で、レジリエンスが非常に高まっている。タルサ市などのような活動のために地域の推進役が重要だ。そして幅広い専門知識を利用する能力、長期的なビジョン、強い政治的な意志が必要になる。

の計画立案を踏まえた内容で、16年に八つの州などの活動提案に対し資金提供があった。ルイジアナ州ニューオーリンズ市は、洪水や雨水対策などに1億4100万ドルが供与された。地域が展開するプログラムもある。米国中央部にあるオクラホマ州タルサ市は、これまで深刻な水害に見舞われてきた。1974年の水害保護プロジェクト開始を機に、氾濫の土地を購入し、建物が高くないようにしたほか、洪水調整池の造成で、レジリエンスが非常に高まっている。タルサ市などのような活動のために地域の推進役が重要だ。そして幅広い専門知識を利用する能力、長期的なビジョン、強い政治的な意志が必要になる。

◇この特集は川嶋かえ、小池寛木、千種辰弥、滝沢美穂子（写真）が担当しました。

震災から25年、阪神・淡路大震災の経験と教訓、防災・減災の大切さを伝える災害ミュージアム

●毎月17日(休館日の場合は翌18日)は入館無料 2月18日(火)は入館無料!

阪神・淡路大震災を伝える語り部フォーラム2020

～伝えてきたこと これから伝えること～

震災から25年が経過する中で企業活動や語り継ぎ活動の現場で活躍されている方々をお招きし、改めてこれまでの歩みを振り返り、教訓の活かし方や伝えることの重要性、震災を風化させないための取り組みについて考えます。

- 基調講演 「震災の教訓は災害文化を創る」 河田 恵昭 人と防災未来センター長
- パネルディスカッション 第1部 「企業の現場から」
- パネルディスカッション 第2部 「語り継ぎの現場から」

日時: 令和2年2月3日(月) 13:00~17:00
場所: 兵庫県公館1階大会議室
申込方法: <https://hitobou.com/entry/form200203fo/>の専用フォームから

震災25年特別展示

■開催中～令和2年5月上旬(予定)
■西館1階 ロビー(無料ゾーン)

令和2年1月17日で阪神・淡路大震災から25年を迎えるにあたり、特別展示を開催します。

Part1. GISで見直す被災地図 Part2. 公開: 新たな震災資料
震災直後に、建物1棟単位の被災状況を手書き資料室が保有する所蔵資料の中から、これまで記録した調査地図の情報をデジタルマップで公開する機会がなかった現物・写真資料などを今回新たに選定し展示紹介します。

117BOX・いいなの箱展

■開催中～令和2年2月24日(月・振休)
■西館2階 防災未来ギャラリー(有料ゾーン)

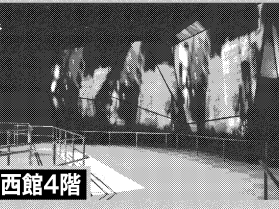
阪神・淡路大震災からの25年を振り返り、117人の方から寄せられた大切なモノ・コトをそれぞれ箱に入れ選定した理由とともに展示します。



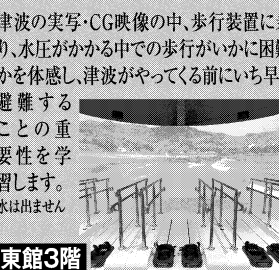
常設展示

1.17シアター

阪神・淡路大震災発生の瞬間を映像と音響で再現します。



津波の実写・CG映像の中、歩行装置に乗り、水圧がかかる中で歩行が徐々に困難さを体感し、津波がやってくる前に早く避難することの重要性を学習します。水は消えません。

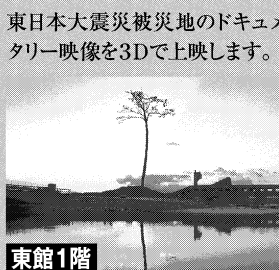


復興への道

震災直後から現在までの復興過程の人の暮らしとまちなみをジオラマで表現します。



東日本大震災被災地のドキュメンタリー映像を3Dで上映します。



建物外観

アクセスマップ

交通アクセス

《鉄道》●阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
●JR「灘」駅から徒歩約12分
《車》●阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
●阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分

有料駐車場有 総合案内での駐車券提示による観覧者割引もございます。